【訃報】

森 信一 先生を忍んで

山 田 勝 彦(31 回生)

平成25年1月23日夕方、第35回生の在京地区同窓会が京都市内で開かれ、私も誘われ同席させて頂いていました。その席に突然「森信一先生がご逝去された」という知らせが入りました。出席者の殆どの方々は森先生をよく知っている方々ばかりであったので、その驚きは大変でありました。1 年ほど前から少し体調を崩され、武田病院に入院されていました。お見舞いに伺うと、間もなくのご退院と聞き安心していましただけに、この度の突然の訃報には驚愕致しました。

森先生は診療エックス線技師法が制定された最初の卒業生で、昭和29年3月にレントゲン技術専修学校の2年課程を第 29 回生として卒業されました。ご卒業後は京都大学医学部附属病院放射線科に勤務され、私共は病院実習で随分とお世話になったことを思い出します。その後一時は電気関係の事業を始められ、病院を退職されましたが、数年後には再び京都大学に復職され、ご定年まで奉職されました。

病院での診療放射線技師としてのご勤務の傍ら、昭和47年から平成5年まで23年間という長い期間に亘って、母校学友会の理事並びに副会長を務められ、学友会の発展に大きな貢献をされました。また日本放射線技術学会理事や、京都府放射線技師会の理事並びに会長を永年に亘って務められるなど、社会貢献にも大きな足跡を残されています。

森先生のお人柄は誰もが知る如く、豪快かつ熱情的で、とくにお酒の入った森先生の大きな声に悩まされた人は、大勢おられたのではないでしょうか。でもそんな中でも、人に対するお心使いは実に繊細で、困った人のご面倒をよくみておられました。

享年79才のご他界は今の時代では少し早すぎるようにも思いますが、これも天命であるならば、これからは天国でゆっくりとお過ごし下さい。そして私達現世の者にも、どうか暖かいご慈悲を頂きますようお願いして、お別れの言葉とさせて頂きます。 合掌

野 原 弘 基(37 回生)

私は、放射線核医学さんさん会からの連絡であなたの突然の訃報に接したとき、何かの間違いではないかと、どうしても信じることができませんでした。一時、体調を悪くされたと伺っておりましたが、鍛えた頑健な肉体を誇っておられたあなたが、卒爾として不帰の旅路につかれてしまうとは、誠に残念で痛恨の極みです。

あなたとの交遊は、同じ山科区へ居住したことが始まりです。当時独身であった私は公私共に大変お世話になりました。「酒を飲めない男は、男じゃない」が口癖のあなたに下戸の私は叱咤激励されながら特訓を受けました。私は下戸を克服することはできませんでしたが、二日酔いの朝にご馳走になった森家の家庭料理の美味しさは、今も懐かしく思い出します。酒をこよなく愛したあなたは、何時も参会者が談笑する輪の中心にありました。その姿を見かけることが無くなったという現実は、悲しい事実として認めざるを得ない淋しさと無念さがあります。

あなたは単純な情報処理人間であることを嫌い、常に問題を見抜き次の手を生みだそうとする情報編集人間でした。このため、あなたの活躍の場は、病院内だけに止まらず、(社)日本放射線技術学会理事として放射線技術学の確立・発展に尽力し、母校の現京都医療科学大学の前身である京都医療技術短期大学の短大昇格には、学友会役員として関与されると共に、(社)日本放射線技師会京都府会長としては診療放射線技師の地位向上と職務の改善に貢献されるなど、多方面にわたってご活躍されました。この間にあって、平成9年に厚生労働大臣表彰、更に平成11年には「保健功労者」として勲六等単光旭日章を受章されています。

あなたが残されたご功績は、形がなくなりましても、その精神はとこしえに残されることに思いいたしますと、再びあなたの温容にまみえることがなくても、あなたのご意志は浸透し、引き継がれていくことと確信いたしております。

最後に、あなたが亡き父母に捧げた感謝の冠句

「贈り物　八十八路健脚　くれた父母」(昨年 12 月京都新聞入選作)をご披露いたし、あなたの在りし日の温顔を偲びながら、あなたが果たされたご功績に対し心からの尊敬と感謝の気持ちを申し上げ、お別れいたします。 どうか安らかにお眠り下さい。

以上

＊通巻 208 号　2013 年 7 月 10 日発行(H25ーNo.2)より